

書きたいこと、書けることがなくなってきたら、真の小説家になる。そのような言葉を、何度か聞いたことがある。自分はその境地にまで未だ達してはいないものの、ユアンスはなんとなくわかる。

小説はあくまでも芸術作品であり、己の主義主張を書き連ねたりする場ではない。主義主張が全面に強く出ていてももちろんかまわないのだが、その大前提として、芸術作品としての高みを目指し技巧を凝らさなければならぬ。それらがなければ、駅前にもどつ立つて拡声器で主張したり、新書等の薄い本でフィクションの力を使わずに主張すればいいわけだ。

書きたいこと、書けることがなくなってきたら、真の小説家になるという真理に関し、エッセイでも同じことが言えると思う。約一四〇

真の小説家

○文字のエッセイを毎週一本、半年にもわたり書き続けるという持久戦の経験は、本コーナーが初めてであった。

最初の何回かは、ネタに困らず書けた。日々色々な新しいことを経験していたし、日頃考えてはいるけど

プロムナード

小説としては昇華させていないことなんかを、一四〇〇字にまとめればよかった。

「プロムナード」という柔らかな傾向のエッセイコーナーの趣旨をよく理解しておらず、観念的だったり強い主張のあるエッセイを、初期にいくつか書いている。それらが尽き



ると、趣味のことを書いたり。三カ月も経った頃には、書きたいことなどなくなった。

自分はエッセイリストでもなくあくまで小説家だから、本当に面白いと思う出来事や考えは小説で表現したいと思ってしまう。だから、テレビやラジオやエッセイでは、二重以下の話ばかりする。

だが、強い引きがない題材だから

羽田 圭介

こそ、とりとめもない話が、執筆者の思いもよらぬ形で、読んでくだった誰かの心に響いたりもするのだと、本エッセイへの感想をもらったりするうち知った。

小さいエンジンの車は楽しいとか、ゴーヤが好きとか、後期には本当によもやま話ばかり書いていたのだが、そういった話のほろが、会った人たちから感想を聞く機会が多かった。

それはたぶん、とりとめもない話をするという語りの方が、口語特有の、費やした時間のわりには中身のあることはあまり話していないというあの感じに似ているからだろう。だから情報密度としては薄いのだが、人の情報認知の仕方に適して

いるため、一文もしくは一単語くらいは、読み手の心に確実に伝わるのだと思う。

自己啓発本なんかの、極論を前面に出す劇薬のような強いタイトルに目を奪われて数秒後、心の中になにも残っていないというあの感じの対極にあるのが、とりとめもないエッセイであったり、現実社会における誰かとの地に足着いた会話なのだと思う。

面倒なエッセイ執筆を引き受けてしまったとずっと後悔していた。けれどもいつしか、一四〇〇文字を書くという身体感覚に、身体が慣れた。相変わらず書きたいネタなどないが、一四〇〇字でとりとめもない身辺雑記を書くことは、いつでもできる。この感覚は、小説にも活かせるかもしれないと思っている。

(作家)